



素粒子物理学実験の現場から

第49回

大阪大学 花垣 和則

大学と研究所

LHCはエネルギーを上げるための補修作業をほぼ終え、この夏から今年後半にかけては全長27kmにおよぶ超伝導電磁石を徐々に立ち上げていきます。順調に進めば、来年早々にビーム、数ヶ月間の調整作業の後、物理解析用のデータ収集を再開します。これに備えてATLASグループも徐々にアクティビティが上がってはいますが、やはりまだビームが出ているときほどの活気はなく、本欄でお伝えするようなニュースがあまりありません。そこで今回は、新年度を迎えてふと感じた大学と研究所の違いについてお話してみようかと思います。

大学スタッフと研究所スタッフの違いは授業のあるなしくらいと思われるかもしれませんが、色々な点で実は結構違いがあります。私を感じる一番の違いは、グループとして活動するかどうかという点です。大学だと、教授・准教授が自分自身で研究する時間を作るのはかなり難しいのですが、研究所だと～長というような立場でなければ、自分自身で研究をやれます。一方で、大学の場合、研究室という単位でそのメンバー全員がなんとなく同じ目標に向かって研究を進めています。独立した研究者の集まりである研究所では、研究者同士が大学の研究室のような纏まり方で研究を進めることはあまりないので、研究所の1人の研究者よりも大学の1つの研究グループのほうがどうしても大きな研究を行うことができます。つまり、自分自身で研究をするのか、グループとしてより大きな成果を目指すのか、という違いがあります。

最近もう1つ違うなと感じるのは、大学での研究は、モノと向き合うというより、人と向き合うことだということです。学生やポストクに自分の研究方針を説明し、足りない知識を与え(与えられることも多いですが)、時には励まして、研究成果を出していきます。研究所にいたときは1人で実験装置と格闘し、深夜までコンピュータに向かい、とにかく1人でモノに向かって成果を上げようとしていました。もうだいぶ前になってしまいましたが、当手を振り返ると今はあまりに違って隔世の感があります。教育という観点も当然ありますし、大学スタッフは人を相手にする職業だと痛感する今日この頃です。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科 准教授

CERNでLHC実験に参加